慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツにおけるカヤ・ヤーナのコメディの受容
Sub Title	Die Rezeption des türkischen Komikers Kaya Yanar
Author	栗田, くり菜(Kurita, Kurina)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2020
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.37 (2020. 3) ,p.13- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20200331-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツにおけるカヤ・ヤーナのコメディの受容

栗田くり菜

1. ドイツにおける非ドイツ系コメディアンの歴史

現在、ドイツでは移民の出自を持つ非ドイツ系[1]のコメディアンが数多く活躍している。1970年代から移民を受け入れてきたドイツだが、彼らがコメディアンとして舞台に上がるようになったのは1980年代以降であった。1985年、移民による初めてのカバレットを立ち上げたのが、トルコからの移民であるシナシ・ディクメン（Şinasi Dikmen, 1945-）とムーシン・オムルジャ（Muhsin Omurca, 1959-）である。彼らは『ノビ・ボンボン（Knobi-bonbon）』[2]というグループ名でウルムの劇場に立ち、移民としてドイツで経験したことをテーマに、ドイツ語でカバレットを上演した。彼らの舞台は社会学者などから一定の評価はされたものの、幅広い観客を

---

1) ドイツでは「移民背景を持つ人物」（Menschen mit Migrationshintergrund）という表現を使うことが一般的だが、定義の仕方によって呼称が変わるため、統一的な呼称を設定する事は難しい。本論の目的は、移民出身者の詳細な定義を行うことではないため、両親や祖父母に移民系出身者がいる人物を「非ドイツ系」（特にその出自を明示する場合には、例えば「トルコ系」）と記すことにする。「移民」や「非ドイツ系」「移民背景を持つ人物」などの定義の変遷については、次を参照。浜崎桂子『ドイツの「移民文学」 他者を演じる文学テクスト』彩流社、2017年。

2) 『ノビ・ボンボン』とは、ニンニク（Knoblauch）と飴（Bonbon）をつなげた単語であり、「ドイツ社会に馴染んだトルコ人はニンニクを食べず、ニンニクをサプリメントとして摂取する」というジョークが込められたグループ名である。

得ることはなく、1997 年に解散した。[3] ノビ・ボンボンの解散後、ドイツでは東西統一など社会的に大きな変化があり、非ドイツ系が主体となったコメディやカバレットは下火になっていった。[4]

しばらくの間、ドイツでは移民のコメディに対する関心が低くなっていたが、カヤ・ヤーナ（Kaya Yanar, 1973-）が登場したことでその状況が大きく変わった。彼は 1973 年にトルコ人両親のもと、フランクフルトで生まれた。ドイツのパスポートを持った彼は、言語的にも社会的にも「ドイツ人」として育ち、自らも「ドイツ人」だと自認していた。[5] 彼はフランクフルトのギムナジウムを卒業したのちドイツの大学に進学したが、途中からコメディアンとして舞台でキャリアを積み大学を中退した。コメディアンとして人気を博したカヤは、2001 年から 2005 年まで SAT1 で *Was guckst Du?!* という番組を持ち、一躍有名人となった。[6] この番組は、初めて非ドイツ系出身者が司会からプロデュースまで務めたテレビ番組である。番組内容としては、司会者となったカヤが、ドイツに暮らす非ドイツ系の人々の日常をコミカルな寸劇で紹介していく構成である。そしてカヤ自らがトルコ系、インド系、イタリア系、ギリシャ系、ロシア系などの

---

3) Terkessidis, Mark: Kabarett und Satire deutsch-türkischer Autoren. In: Chiellio, Carmine (Hg.): Interkulturelle Literatur in Deutschland. Stuttgart 2000, S. 294-301.

4) Boran, Erol M.: Eine Geschichte des türkisch-deutschen Theaters und Kabaretts. Ohio State University 2004. http://publikationen.ub.uni-frankfurt.de/opus4/frontdoor/index/index/year/2009/docId/12320 （2019 年 10 月 31 日閲覧）

5) 2004 年のツアーで、彼は「僕は長いこと、自分のことをドイツ人だと思っていた。［略］今はトルコ人でもドイツ人でもどちらでも良い」と発言している。また複数のインタビューで、トルコ語は基本的な挨拶以外は理解できていないと繰り返し発言している。そのことから、カヤは少なくともコメディアンとして成功を掴む 2000 年代前半までは、自分のアイデンティティをドイツ寄りに考えていたと想定できる。Yanar, Kaya: Was guckst du?! Besto of Staffel 1-4. WVG Medien 2004. [DVD]（これは 2001 年から 2005 年までの間に放送された内容のうち、とくに人気のあったものをまとめた内容である）

6) カヤ・ヤーナは苗字の「ヤーナ」ではなく名前の「カヤ」で全てのショーや番組に登場しており、「カヤ」として親しまれている。そのため本論でもあえて名前の「カヤ」で呼びたい。

非ドイツ系のステレオタイプなキャラクターをコミカルに演じるこの番組は、瞬く間にドイツで有名となった。[7] この番組でカヤは、2001 年にドイツテレビ番組賞（Deutscher Fernsehpreis）を受賞した。そして放送終了後、カヤはテレビ番組からライブパフォーマンスへと自らの活動場所を移す。彼はドイツやオーストリア、スイスをはじめヨーロッパ各国でツアーを行い、2014 年には非ドイツ系コメディアンとしてはじめてドイツコメディ大賞（Deutscher Comedypreis）を受賞した。そして彼に続くように、ビューレント・ジェイラン（Bülent Ceylan、1976-、トルコ系）、エヅジャン・ジョシャ（Özcan Coşar、1981-、トルコ系）、エニッサ・アマニ（Enissa Amani、1981-、イラン系）、アブデルカリム（Abdelkarim、1981-、モロッコ系）、タネー・シャファチュク（Thanee Schaffarcyk、1992-、ポーランド系）など多くの非ドイツ系コメディアンが登場している。このようにカヤの成功がきっかけとなり、非ドイツ系コメディアンがドイツで活躍することになった。そのためカヤは研究者だけではなく、同業者や観客からも「移民に対する差別を是正するもの」として好意的に評価されている。しかし、様々な非ドイツ系キャラクターを演じるということは、このあと述べるように問題も含んでいる。果たしてその評価が本当に妥当であるといえるのか、本論で改めて吟味したい。

2. カヤに対する先行研究の評価

2. 1. 戦略的なステレオタイプの利用

文化的・民族的なグループをテーマに、文化的・言語的・民族的な視点がステレオタイプとして表現されたコメディをエスノコメディと呼ぶ。[8] カヤのコメディでは、非ドイツ系のステレオタイプなキャラクターが複数登場するので、彼のコメディもエスノコメディのジャンルであるといえる。マルティナ・ティーレによれば、ステレオタイプとは人やものをグループ、

---

7) *Was guckst Du?!* により知名度が上がったカヤの人気は凄まじく、彼は常にマスコミやファンから追いかけられることになり、ドイツでは自らのプライベートが確保できずスイスに移住した。

8) Specht, Theresa: Transkultureller Humor in der türkisch-deutschen Literatur. Würzburg 2011, S. 102.

タイプ、階級などでカテゴリー化したものであり、多くの場合は感情的な評価も加わっている。[9] つまり、ネガティブなステレオタイプが差別的感情につながる可能性も存在するということである。それでは非ドイツ系キャラクターのステレオタイプを使ったカヤのコメディは、差別的なものにならないのだろうか。それに対して、ヘルガ・コットホフは *Was guckst Du?!* でカヤが演じるコメディは必ずしも移民に対して差別的な内容とはいえず、むしろ移民に対する差別の存在をあらわにする可能性があると評価している。[10] コットホフは、あらゆる行為にはその社会における文化的な状況が前提となって書き込まれているため、行為を分析することで、その社会に存在する文化的なコンテクストを明らかにする „doing culture“ という考えを引き合いに出す。そしてカヤが行なっているようなエスノコメディを、通常の行為を誇張したものであることから、„overdoing culture“ とよび、通常であれば暗黙の存在である文化的視点や背景が明らかになるとした。[11] これはつまり、ドイツ人が非ドイツ系に対して抱く暗黙の想定が、エスノコメディで誇張されて表現されることで明らかとなる、ということである。

テレーザ・シュペヒトは、カヤのコメディを見た観客は、彼の演じるキャラクターのステレオタイプを笑っているのではなく、表現方法を笑っていると分析している。[12] カヤの演じる人物があまりにもステレオタイプ的なので、観客は「イタリア人自体ではなく、イタリア人のキャラクターを笑っている」というのである。[13] たしかに彼のコメディにはトルコ人のハーカン、イタリア人のフランチェスコ、インド人のランジッドなど、

---

9) Vgl. Thiele, Martina: Medium und Stereotype. Konturen eines Forschungsfeldes. Bielefeld 2015.

10) Kotthoff, Helga: Komik (in) der Migrationsgesellschaft. München 2013, S. 68.

11) Kotthoff, Helga: Overdoing Culture. Sketch-Komik, Typenstilisierung und Identitätskonstruktion bei Kaya Yanar. In: Hönning Karl H. u. Reuter, Julia (Hg.): Doing culture: neue Positionen zum Verhältnis von Kultur und sozialer Praxis. Bielefeld 2004, S. 187.

12) Specht: a. a. O., S. 119.

13) Ebd., S. 120.

様々な移民が登場する。たとえばハーカンはオールバックの髪に黒いレザージャケットを着て、トルコ語なまりのドイツ語を話す。フランチェスコはイタリア語なまりのドイツ語を話し、常に女性を口説こうとしているし、身振りも大げさで情熱的な話し方をする。ランジッドは常に陽気で頭を左右に揺らしていて、IT 技術者としてドイツで働いている。このようにシュペヒトによれば、全てのキャラクターが、その民族に対するステレオタイプを誇張して演じられているため、観客は演じられたキャラクターが現実に存在するものではなく、虚構のものであると理解する。ステレオタイプを強調した演出により、特定の民族グループを笑っているのではなく、誇張されたステレオタイプ自体を笑っている、という構造が生まれるという。またシュペヒトは、カヤのコメディの中に、観客が持つ既存の価値観を転覆するような瞬間（transkultureller Moment）があると評価している。シュペヒトはその例として、*Made in Germany*[14] でカヤが 2007 年にミューゲルンで起きた移民への暴力問題に言及していることをとりあげ、観客に移民問題を提示し議論に導くような点があると評している。[15]

以上のように、これまでの先行研究においてカヤの番組は、あえて非ドイツ系に対するステレオタイプを誇張することで、観客が抱くステレオタイプ的な思考を批判的に指摘している、という点で評価されているといえる。

2. 2.「非ドイツ系」に対するイメージの変容

次にカヤに対するもう一つの評価について検討したい。それは、カヤのコメディが非ドイツ系への差別的な感情を軽減・是正している、というものである。たとえば前出のコットホフは、カヤが *Was guckst Du?!* でトルコ系やインド系、ロシア系といった様々な移民を演じて人気を得たことに

---

14) Yanar, Kaya: Made in Germany Live. 2008. [DVD]（これはカヤが 2007 年に行ったライブの総集編 DVD である）

15) Specht: a. a. O., S. 124. 2007 年ドイツのミューゲルンで 50 人以上の右翼のドイツ人が、8 人のインド人を襲撃した。12 人以上がけがをし、70 名以上の警察官が投入されたこの事件は、ドイツ国内の外国人に対する差別が顕在化した事例として、国内外に大きな衝撃を与えた。

注目し、彼の活躍によりドイツ社会に暮らす複数の民族がポジティブにメディアで表現された、と評価している。[16] また『ノビ・ボンボン』の設立者であるシナシ・ディクメンも、コットホフとのインタビューで次のように語っている。

> コットホフ：テレビ番組にとって、（カヤが）様々な移民キャラクターを登場させ、ドイツ人も社会にいる複数いるグループの一つに過ぎない、と自覚させた功績は大きいのではないでしょうか？
> ディクメン：もちろん、（カヤが）ドイツにおける少数派の統合に果たした役割は大きいです。彼のような存在を通じてドイツ人の多くは移民に対して好意的になり、例えばトルコ人を受け入れやすくなりました。もしもあなたがテレビで、182 センチもある長髪のビューレント・ジェイラン[17] を見て、彼がとても親しみやすかったら、道ですれ違うトルコ人にもきっと親しみを感じることでしょう。（カヤの活躍は）もちろん移民の統合政策に対して貢献しています。[18]

さらに筆者が『ノビ・ボンボン』のもう一人の設立者であるトルコ系コメディアンのムーシン・オムルジャにインタビューした際にも、次のような回答を得た。

> オムルジャ：カヤの番組はコメディだから、政治的な内容や風刺といったものは含んでいない。彼はあくまで、観客を笑わせることに主眼を置いている。しかしだからこそ、観客はリラックスした雰囲気の

---

16) Kotthoff: Komik (in) der Migrationsgesellschaft, S. 52.

17) ビューレント・ジェイランは 1976 年生まれのトルコ系コメディアンである。彼は黒い長髪に黒いレザージャケット、そして黒いパンツで舞台に立つ。ジェイランのコメディの特徴は、彼が出身地であるマンハイムの方言を使ったプログラムを作っているという点である。「非ドイツ系」のコメディアンに対して観客が想定しうるであろうテーマをあえて外して、ドイツ国内の方言に着目した点が興味深い。

18) Kotthoff: Komik (in) der Migrationsgesellschaft, S. 52.

中で様々な移民に対して好意的な感情を持つし、差別的な感情を持たなくなる。カヤのコメディは、非ドイツ系に対する差別を正すものとして見ることができる。(2019 年 2 月 15 日、エッセンにて)

このように、カヤに対して単にステレオタイプ的な思考への批判だけではなく、非ドイツ系に対する差別自体を是正する契機を見出し評価している先行研究や同業者も存在する。しかし、1 で述べたようにカヤはドイツ国籍を持ったドイツ人であり、また後述するように非ドイツ系キャラクターを演じる際に問題と思われる演出もみられる。そのため、彼のコメディを単純に「移民に対する差別を乗り越える事例」として積極的に評価することには、問題があると言わざるを得ない。そこで次の章では、カヤが「自分」をどのように捉えて演出しているのか、実際のコメディから分析を行う。

3.「非ドイツ系の代弁者」としての期待

カヤはフランクフルトで生まれ、社会的にも文化的にもドイツで育った、ドイツ国籍を持つ「ドイツ人」である。そしてこの点は、彼のコメディを見る観客やジャーナリストにとっても自明の事実である。つまり観客は、カヤが「ドイツ人」であることを理解したうえで、彼のコメディを消費している。しかし一方で、カヤのトルコ系ルーツに注目する見方も根強い、とカヤはインタビューやショーの中で述べている。たとえば *Made in Germany* の中で、彼は自分が体験したことを次のように語っている(以下、本論ではカヤの発言を「K」、観客を「P」と表記する。また、参考のために和訳ののちに筆者が DVD から書き起こしたドイツ語を付す)。

K:僕自身がメイド・イン・ジャーマニーだから、いつも聞かれる質問があるんだ。僕はジャーナリストたちから常に、ドイツ系トルコ人、トルコ系ドイツ人として質問されるんだ。ドイツ人とトルコ人に関係するテーマ全てについてね。僕はいわば代表みたいなもんなんだと思う。でも、僕は実際は代表じゃないんだ。僕はトルコ人の代表なんかじゃない。僕は 2500 万人のトルコ人を知っているわけじゃない。そう、でもドイツのジャーナリストたちはまるであたかも僕がそうであ

るかのように話すんだ。最初の質問は必ず「ヤーナさん、自分自身をドイツ人だと感じます？それともトルコ人？」
P：（笑い）
K：僕は「えっと…ちょっと考えてみないとわからないです」と言うのだけど「でも決めなくてはいけませんよ！ドイツ人ですか？それともトルコ人？」。わからないよ、じゃあ聞くけどドイツ人たちはどう思ってるんだ？君たちが自分のことをどのように感じているのかはわからない。朝起きて、「おっ、今日もドイツ人だなぁ！」って感じるのかい？
P：（笑い、拍手）
K：君たちならこの質問に答えられるかい？トルコ人だって毎朝起きて、「おぉ、今日もトルコ人だぜ！」って思うわけじゃないんだ。「わかりません、ドイツ人とかトルコ人とか、そもそもどのように感じたらいいんでしょうか？それは正しいんでしょうか？それってどうでもよくないですか？」とジャーナリストにいってみても、「ダメです、決めていただかなくては。ドイツ人ですか？トルコ人ですか？」って。「（泣き真似をしながら）だいたいの場合は人間という自覚があります…これでいいですか？雄牛だって感じることもあるけど、だいたいは人間です」
P：（笑い）
（*Made in Germany*, 2008）

（ドイツ語）
K: Made in Germany, ich wird auch ständig gefragt. Als Deutsch-Türke, Turko-Germane, werde ich ständig gefragt, so von den Journalisten, von allen Themen die Deutsch-Türkei betreffen. Ich bin so ne Art Representant. Aber ich bin kein Representant von der Türk. Nee. Ich kenn mal zu Erst nicht fünfundzwanzig Millionen, ich kann nicht für alle sprechen. Ja, aber die Deutsche sprechen dann so mit mir, die Journalisten: „Herr Yanar, fühlen Sie sich Deutsch oder Türkisch?“
P: (lacht)

K: Und ich so: „Eh, eh…Da muss ich mal dran nachdenken, nicht? Ich weiss nicht!“ „Ja, Sie müssen sich schon entscheiden, Deutsch oder Türkisch?“ Und ich: „Eh… keine Ahnung, wie fühlen sich denn Deutsche? Ich weiss ja nicht, wie ihr euch fühlt. Ist ja nicht so, dass ihr morgens aufwacht und ‚Oh! Ich bin Deutsch!‘“

P: (lacht, klatscht)

K: Nee, kannst du die Frage beantworten? Türken stehen nicht morgens auf und „Ey, ich bin Türk“. Ich sagte, „Ich weiss es nicht, wie sich Deutsche und Türken fühlen. Wie müssen sich denn Deutsche und Türken fühlen, ist das nicht relevant? Ist das nicht egal?“ „Nein, Sie müssen sich entscheiden, Deutsch oder Türkisch?!“ „(weinend) Ich fühle mich meisstens als Mensch, reicht das? Manchmal als Hornochse, aber meisstens als Mensch“.

P: (lacht)

カヤが語っているように、彼自身は「トルコ人の代表なんかじゃない」。そして同時に彼は、「ドイツ人」「トルコ人」というカテゴリーに自分を分けることが難しく、また観客もそうなのではないかと述べている。だれでも、自分が属する人種カテゴリーを常に意識しているわけではない。またそのように自明で確固たるものだと思っている人種や文化といったものは、実際には曖昧で恣意的なものでないか、と観客に問いかけているのだ。

しかしカヤは、自らを単純にカテゴライズできないと述べている一方で、自分の外見が非ドイツ系として観客に受け入れられている点も自覚しており、それを踏まえたうえで自らのパフォーマンスを作っている。それが端的に現れているのが、カヤが演じるインド人のキャラクター「ランジッド」である。ランジッドはインド系のエンジニアという設定で、常に陽気で間抜けなキャラクターである。そしてランジッドを演じる時、カヤは黒いおかっぱのカツラを被り、顔を黒く塗って肌を浅黒くしているのだ。しかしその点について、カヤが批判をされたことはない。ドイツ人が顔を黒く塗り他の人種を表現すると人種差別と非難されるにもかかわらず、[19] カヤは

19) Eich, Martin: Weiss und schwarz- oder schwarz-weiss. In: Neue Züricher Zeitung (24.

批判されない。それどころかランジッドというキャラクターが人気を博したことで、ランジッドが主人公の映画まで制作している。[20] その点についてカヤは、「もしかしたら観客は、無意識に僕と白人とを区別しているのではないか。カヤはどうせオリーブ色の肌だし、移民出身者だから、という具合に」と述べている。[21] これは観客がカヤを非ドイツ系の人として受容しているということを示しているエピソードとしてみることができる。つまりカヤのコメディは、彼が非ドイツ系だからこそ演じることができるもので構成されており、「ドイツ人」が同じコメディを演じたら問題になるものを孕んでいる。そして観客の多くは、実際にはカヤが「ドイツ人」であることを理解しているにもかかわらず、カヤを非ドイツ系として受容している。そのため、彼のコメディを「移民に対する差別を是正しているもの」と単純に評することには大きな問題があるといえるだろう。このように、カヤが批判されずコメディアンとして成功している背景には、彼による自分自身の立場の演出が功を奏しているからだということができる。

4. 演じられる wir と ihr

2006 年からカヤがドイツ全土で行なったツアー *Made in Germany* はカヤが司会進行を行いながら、前述の様々なキャラクターになりつつ、ドイツ社会で非ドイツ系が経験したことを話すショーである。ここで特徴的なのは、カヤはドイツ人であるにも関わらず、「僕たち非ドイツ系」という意味での「僕たち」（wir）を頻繁に用い、自らを非ドイツ系の登場人物として位置付ける、という形式をとっている点である。彼は観客に語りかけ

---

02. 2012). https://www.nzz.ch/weiss_und_schwarz_oder_schwarz-weiss-1.15263287（2019 年 10 月 31 日閲覧）

20) この映画では、カヤはインド系のランジッドの他にトルコ系のハーカンなどのキャラクターを演じているが、商業的には成功しなかった。Yanar, Kaya: Agend Ranjid rettet die Welt. Constantin Film. 2012. [DVD]

21) Sander, Matthias: Kaya Yanar, vom Prolltürken zum Wutbürger. In: Neue Züricher Zeitung (29. 03. 2019). https://www.nzz.ch/wochenende/kaya-yanar-vom-prolltuerken-aus-was-guckst-du-zum-wutbuerger-ld.1470758（2019 年 10 月 31 日閲覧）

る際には「君たち」(ihr) という表現を使っており、繰り返し自分が移民側の登場人物であることを強調している。103 分間のショーの中でカヤは wir を 125 回、ihr を 208 回使っており、これは約 19 秒に 1 回、いずれかの発言が登場することを意味する。このように彼は、自分を非ドイツ系として位置づけることで様々な笑いを仕掛ける。例えば、カヤは次のような話を披露している。

K：僕たちのトルコ語には「ü」がありすぎる。なんでかは僕もわからないんだ。そして君たちドイツ人は、僕たちについてのジョークを言うよね。そうさ、トルコジョークはみんな知ってる。トルコ人ですら知ってるよ。君たちが話すトルコジョークのうちいくつかは面白いしね。笑えるやつだよ。僕も 5 年前に、うーん、いわば「トルコ系移民背景を持ったドイツ人」[22] に教えてもらったんだ。
P：(笑い)
K：彼はマルクスっていう 13 歳の少年で、僕のファンだった。そして彼は僕とトルコ語訛りのドイツ語しか話さなかったんだ。彼にサインを渡したら、こっちにやってきて「よぉカヤ、調子はどうよ？！」って話しかけてきた。
P：(笑い)
K：僕は彼を見て、「えっと…君はドイツ人かい？」と聞いたら「おうそうだぜ、でもお前たちの言葉もしゃべれんだ！」と言った。横に立ってる彼のお母さんは、「ヤーナさん、なんとかしてください（泣き真似をしながら)」と言った。
P：(笑い、拍手)
K：マルクスはかっこよくて、こう話しかけてきた。「なぁカヤ、トルコジョーク知ってっか？」それで僕は殴る真似をしながら「それは興味深いな、マルクス。ちょっと言ってみてごらんよ」って言ったんだ。

---

22) ここでカヤは単純に「ドイツ人」とは言わず、「ドイツ系トルコ人」をもじった「トルコ系移民背景を持ったドイツ人（Deutscher mit türkischem Migrationshintergrund)」と表現している。

彼は僕に教えてくれて、僕はおもわず笑ってしまった。このジョークを知ってる人もいるかもしれないけど、聞いてくれ。『問い：トルコの幸運のルーレットはどうしたらいい？答え：全てüにする』[23)]

P：（ためらったような笑い）

K：いいんだ、君達も笑っていいんだよ。違う、これは差別じゃないよ。事実なんだから。僕たちトルコ人は、たくさんのüを使っている。このジョークはトルコ人に話しても大丈夫なジョークさ。あ、でもトルコ人が話さなきゃいけないよ、ドイツ人が話しちゃまずいぜ。

P：（笑い）

（*Made in Germany*, 2008）

（ドイツ語）

K: Wir haben zu viele „ü“s in der Sprache. Ich weiss auch nicht. Und ihr Deutschen machen Witze über uns. Ja klar, Türkenwitze kennen alle. Kennen sogar die Türken. Einige Türkenwitze die ihr erzählt, sind sogar gut. Darüber kann man lachen. Einen, den man mir erzählt hat, das war vor fünf Jahren, das hat mir ein … ich würd sagen, ein Deutsche mit türkischen Migrationshintergrund.

P: (lacht)

K: Nee, es war Markus, 13 Jahre alt, ein Fan von mir, aber der hat mit mir nur Türkdeutsch mit mir gesprochen. Ich hab ihn mein Autogramm gegeben, da kam er zu mir: „Ey, Kaya, klar? Was geht?!“

P: (lacht)

K: Ich guckte ihn an und „Eh, eh…bist du’ne Deutsche?“ „Ey, ja ne krass, aber ich kann die Sprache!“. Und die Mutter stand daneben und „Ach (weinend)… tun Sie was, Herr Yanar.“

---

23) ドイツの娯楽番組で放送される「幸運のルーレット（Glücksrad）」は、出演者による単語当てゲームである。各出演者が字を順番に当てていき、隠れている単語を最初に正解した人が勝つ。トルコ語は「ü」という音が多い言語なので「ü」と言えば正解となる、というジョークである。

P: (lacht, klatscht)

K: Markus war cool, kommt zu mir und sagte „Ey Kaya, kennscht du'n neuen Türkenwitz?“ Und ich so, „Ja ich bin mal gespannt, Markus. Komm her.“ Nee, er hat mir den erzählt und ich musste lachen. Vielleicht kennt ihr den. Also: Wie geht türkisches Glücksrad? – Ich nehme ein „ü“. Ding ding ding ding ding!

P: (lacht unterdrûckt)

K: Ihr dürft lachen, es ist okay. Nee, es ist kein Rassismus, es ist die Wahrheit. Wir haben viele „ü“s. Das ist ein Witz, den könnt ihr Türken erzählen, wir lachen darüber. Aber Türken müssen uns den Witz erzählen, nicht die Deutschen.

P: (lacht)

カヤはマルクスの真似をする時に、表情やアクセントをトルコ系の若者がするような表情とアクセントに変えている。そして自分自身の返答を再現する時には、アクセントのない落ち着いたドイツ語で話している。そのためカヤが非ドイツ系の外見をしているにもかかわらず、彼の表情やアクセントからカヤがドイツ人として、またマルクスがあたかも「トルコ人」として表現されるのだ。このようなねじれた状況の中で、トルコ語に関するジョークが語られている。観客は、カヤが幸運のルーレットを説明したときにそれまでよりも小さな笑いを漏らす。その後のカヤの発言から、これは観客がトルコ語に関するジョークを笑うことを躊躇したためであることがわかる。この話で登場するマルクスがドイツ人の少年であるため、ドイツ人の観客はマルクスが話したトルコ人に対するジョークを笑って良いのか戸惑う。カヤは観客のその戸惑いを感じ、「いいんだ、君たちも笑っていいんだよ。違う、これは差別じゃないよ」と観客に笑うことを許可し、それを聞いた観客は安心したように笑う。そしてトルコ語に「ü」が多いのは事実なのだから、トルコ人にもこのジョークは通じると保証する。しかし最後に、「でもトルコ人が話さなきゃいけないよ、ドイツ人が話しちゃまずいぜ」と付け加えている。もしこの場面でマルクスが登場せず、カヤが自分のジョークとして話したのであれば、おそらく観客は戸惑うことな

く笑うことができた。しかしドイツ人であるマルクスがカヤに対してトルコ人に関するジョークを話したという設定であるため、観客は戸惑ったのである。

この「ドイツ人観客の戸惑い」については、前出のオムルジャも言及している。「ドイツ人の観客は移民に関するジョークを聞いた時、笑って良いか否か常に判断している。非ドイツ系に対するジョークを笑うことが差別になってしまうことを、彼らは知っているのだ。そして差別になってしまうことを極端に恐れている。それは興味深いことに、そのドイツ人に教養があるほど顕著な傾向である。だからドイツ人は、語り手が非ドイツ系だと安心して笑う」(2019 年 2 月 15 日、エッセンにて)。同様にコットホフも、「どの口からジョークが語られているか」が重要だと述べている。[24] 非ドイツ系の人物がマイノリティに関するジョークを言うことは問題ないが、ドイツ人がマイノリティに関するジョークを言うことは許されない。そしてカヤは自分の外見や名前を利用して自らを非ドイツ系として強調することで、自分が移民に関するジョークを言うことに、表面上の正当性を与えているのだ。しかし観客にはその正当性が与えられていないため、一部の観客はこのコメディで笑うことを戸惑った。つまり、カヤのコメディが成り立つ根底には、彼自身が自分を非ドイツ系として演出している点が功を奏している、といえる。彼はショーの中で巧みに「カヤ・ヤーナ」という人物を演じているのである。だからカヤは「カヤ・ヤーナ」という名前で自分のショーを行い、ショーのタイトルもあえて *Made in Germany* にしている。これについて彼は次のように解説している。

> 「僕がメイド・イン・ジャーマニーなんだ。いわば僕こそが、成功した統合政策の結果なんだよ。君たちはこういう存在がずっと欲しかったんだろ？ドイツにはかれこれどれくらい前からトルコ人がいるんだ？ 50 年か 60 年か、よくわからないけど。でも君たちはいつも『ドイツ社会に統合しなさい！』って言ってただろ。その結果が僕さ。」(*Made in Germany*, 2008)

---

24) Kotthoff: Komik (in) der Migrationsgesellschaft, S. 185.

ここからわかるように、彼は「僕たち（wir）」と表現し、自分を移民に位置づけながらも自分が「成功した統合政策」の結果だということで、ドイツ社会に適合できている存在だと強調している。カヤは非ドイツ系の出自でありながら、ドイツ社会にとっても部外者ではなく、むしろ望まれた存在である自分を巧みに演じることで、非ドイツ系に関するジョークを言えるドイツ人、という立場にいることができる。彼はドイツ社会にとっての「僕たち（wir）」と「君たち（ihr）」をつなぐ役割をうまく演じているといえるだろう。

5. 結語

カヤの登場により、ドイツのコメディは大きく変化した。非ドイツ系のコメディアンの先駆者として観客を獲得し、有名となった彼の功績は評価に値する。またドイツ国内に住む非ドイツ系の存在に言及し、それぞれの民族に対するステレオタイプを誇張したキャラクターを作り上げたことで、ステレオタイプの正誤が問題なのではなく、観客が持つステレオタイプ的な思考へ批判を向けることにも一定の貢献をしたといえる。この点については、先行研究が評する通りである。

しかし同時に、カヤのコメディはあくまで人種や文化を固定的なものとして想定したものであり、インターカルチャーの発想から作られている。越境文化を「伝統的な統一的文化観を疑問視し、それに対してひらけたダイナミックな文化理解を促進するもの」[25] と定義すると、統一的な文化や民族、アイデンティティという概念を疑問視するようなコメディが、越境文化的なコメディということができる。つまり個人が文化的アイデンティティを想像するメカニズムや、ステレオタイプ的な思考をいだくこと自体に疑問を投げかけるコメディは、越境文化的な機能を持っているということができる。しかしカヤのコメディは、あくまで民族や文化などのアイデンティティが存在することを前提にしているため、先行研究でシュペヒトが述べているような、越境文化的な側面までを認めることは難

25) Specht: a. a. O., S. 103.

しい。[26)]

そしてカヤのコメディは、彼が自分を非ドイツ系として演出していることで成立している内容であることも確認した。彼は、自らがどのように観客に受け入れられているかを自覚し、それを戦略的に利用しているのである。そのようなカヤや彼のコメディに対して、非ドイツ系に対する差別を是正する契機を見出す評価もあるが、それは問題のある評価だと言わざるを得ない。彼自身のアイデンティティや文化的・社会的な状況はドイツ寄りであるにもかかわらず、彼は非ドイツ系の代表として受け取られている部分が存在する。そしてカヤの発言やコメディを非ドイツ系の代表として想定し、彼のパフォーマンスを通じて「非ドイツ系への差別への是正に貢献した」と安易に論じることは、逆に非ドイツ系の存在を無視することにつながりかねない。繰り返しになるが、カヤはドイツ国籍を持つドイツ人であるが、両親はトルコから移住してきた背景を持つ。商業的に成功した「非ドイツ系コメディアン」は、ドイツ社会が求めた非ドイツ系のイメージをうまく見せることができた人物である、ということを意味する。そしてそれは実際にドイツで生活する非ドイツ系の人々の事情の複雑さや繊細さを単純化したり、捨象したものである可能性が高い。「非ドイツ系」という定義ですら研究者の間でも問われているのに、カヤが演じるコメディを単に「非ドイツ系全体への差別が減ることに貢献した」と判断することは、危険であろう。たしかにカヤのコメディの果たした貢献は大きいが、他方で彼のパフォーマンスを他の非ドイツ系の存在に強引に当てはめることには配慮が必要であるといえるのではないだろうか。

（法政大学経済学部非常勤講師）

---

26) 文化を固定的に捉えている立場のコメディを作っているのがカヤだとすると、文化という概念の自明性自体を問い直しているのがセルダ・ソムンジュ（Serdar Somuncu、1968-、トルコ系）である。ソムンジュについては別の機会に論じたい。また多文化主義への批判的検討についてはヴェルナー・ハーマッハー『他自律　多文化主義批判のために』増田靖彦訳、月曜社、2007 年を参照。

Die Rezeption des türkischen Komikers Kaya Yanar

Kurina Kurita

In dieser Arbeit werden der türkische Komiker Kaya Yanar (1973-) und seine Komik thematisiert. Die These ist, dass die bisherige Forschung Kaya nicht richtig kritisiert hat. In der bisherigen Forschung wurde Kaya hauptsächlich freundlich aufgenommen. Helga Kotthoff achtet auf die vielfältigen Figuren, die in Kayas Comedy auftreten: Kaya spielt den türkischen Hakan, den italienischen Francesco, den indischen Ranjid und die russische Olga U.A. Es treten noch weitere Figuren in seiner Comedy auf. Auf diesen Figuren baut er seine Komik auf und bringt das Publikum zum Lachen. Weil Stereotype meistens sowohl mit positiven als auch mit negativen Affekten hervorgerufen werden, kann das Lachen über Stereotype diskriminierend wirken. Doch laut Kotthoff wirkt es in Kayas Komik anders: weil die Figuren als übertriebene Stereotype dargestellt werden, wird dem Publikum klar, dass die stereotypischen Figuren nicht wirklich existieren. Im Gegenteil: Durch die übertriebenn Darstellungen der einzelnen stereotypischen Figuren und Situationen wird die stereotypische Denkweise des Publikums auffällig. Theresa Specht sieht in Kayas Komik transkulturelle Momente. Weil Kaya in seiner Comedy auch die Probleme der Migranten in Deutschland (z.B. den Fall in Mügeln) ergänzt, soll Kayas Comedy transkulturelle Momente erhalten. Somit lässt sich feststellen, dass der Forschung zufolge in Kayas Comedy die stereotypische Denkweise des Publikums kritisiert wird.

Andererseits wird in der bisherigen Forschung Kayas Comedy auch als ein „Beispiel für Ausgleichung der Diskriminierung gegen Menschen mit Migrationshintergrund“ beschrieben. Zum Beispiel behaupten Şinasi Dikmen und

Muhsin Omurca, die Gründer des ersten deutschsprachigen türkischen Kabaretts „Knobi Bonbon“, im Interview, dass Kayas Comedy dazu beigetragen hat, die Angst gegen Migranten zu reduzieren. Sollte diese Einschätzung tatsächlich korrekt sein?

Kaya ist „Deutscher“. Er ist in Deutschland aufgewachsen und hat einen deutschen Pass. Doch auf der Bühne tritt er als „Türke“ auf, und das Publikum nimmt es unkritisch an: Kaya spielt in seiner Comedy den indischen Ranjid, aber er schminkt dabei sein Gesicht schwarz, damit er wie ein „Inder“ aussieht. Und er erhält dabei keine Kritik. Obwohl er „Deutscher“ ist, kann er auf der Bühne sein Gesicht schwarz schminken und Comedy über Migranten machen, da Kaya sich auf der Bühne als ein „Türke“ ausgibt. Er benutzt oftmals „wir“ und „ihr“, und so prägt er dem Publikum ein, dass er ein Teil der „Türken“ ist. In meinem Beitrag wird sein Programm genauer analysiert und gezeigt, wie er das „wir“ und „ihr“ inszeniert. Zusammengefasst lässt sich sagen, dass die Meinung, er schaffe die Diskriminierung gegen Menschen mit Migrationshintergrund durch seine Komik ab, kritisiert werden soll.